

解説・提言 1

子どものスポーツ・芸術活動の規定要因

—親から子どもへの文化の相続と社会化格差—

駒澤大学教授 片岡 栄美



1. スポーツ経験と芸術経験の社会的意味

本稿では、子どもの学校外教育に焦点をあて、「子どもが1年間に定期的にしてきた運動やスポーツ活動」(スポーツ活動と略す)と、「1年間に定期的にしてきた音楽活動や芸術活動」(芸術活動と略す)を取り上げる。そして活動を経験する子どもと経験しない子どもの違いについて、その原因を家庭背景、ジェンダー差、文化の相続効果の視点から分析する。データは、2009年にBenesse教育研究開発センターが実施した3歳～17歳(高2生)の子どもをもつ15,450名の母親へのインターネット調査による。

子どもはさまざまな場を通じて、スポーツ活動や芸術活動を経験している¹⁾。家庭教育、学校の部活動や放課後活動、そして学校外教育²⁾などである。そのなかでも、今日の親たちは学校外教育を利用し、子どもたちにスポーツ活動や芸術活動を好んで経験させている。親の教育投資の多くが、学校外教育に対するものである。

日本の子どもたち(幼児～高校生)のスポーツ活動、芸術活動の規定要因を明らかにすることは、親の教育投資の階層性を明らかにするだけでなく、子育ての階層性、すなわち子ども期の社会化経験の不平等の実態を明らかにするという意味ももっている。

近年、子どもと階層格差の問題は、親の経済力と学力の関連に焦点があてられてきた。しか

し、子育ては学力や進学だけが重要なわけではない。何よりも教育経験の中身、つまり社会化経験としての文化活動・スポーツ活動の格差へも目をむけるべきであろう。この問題は、子育てと社会化の機会格差の問題であると同時に、文化の不平等問題へもつながっていく。

社会学的にいえば、子ども期のスポーツ活動経験は、いわば身体資本やスポーツへの嗜好性を形成する。また子ども期の芸術活動経験は、子どもの美的性向や文化的嗜好性、いわば文化資本の形成と蓄積に寄与する。つまり子どもたちが芸術活動を通じて、いかに文化的能力を獲得・形成していくかという問題である。

このような身体資本や芸術文化資本(片岡1998, 2001)が獲得される場合は、主として家庭と学校である。たとえば親が絵画を好きであった影響で、幼いうちから子どもが美術に関心を抱き、芸術文化への嗜好性を「体得的」に獲得することがある。これは、家庭教育を通じた親から子どもへの「文化(資本)の相続」である。

また学校では、美術や音楽、体育の授業を通じて、「系統的」に学習することで身体資本や芸術文化資本を効率的に身につけることができる(ブルデュー1990)。

しかしすでに述べたように、昨今では学校外教育の影響を無視できない。すなわち教育投資として概念化できる、習い事、おけいこごと、あるいは親や子の主体的選択として行われる学校外でのさまざまな活動経験を通じて、子ど

もの身体資本や文化資本は獲得されていく。

今回の調査では、親の教育意識や文化的嗜好性も明らかにしているので、世代間（母親から子どもへ）で繰り広げられている、身体資本と文化資本の伝達・相続の実態を明らかにすることもできる。さらに、スポーツ活動と芸術活動のジェンダー差がなぜ生じるのかについても検討する。

2. 学校外教育の概念の精緻化と子どもの活動のパターンの類型

親の教育投資や学校外教育に関する研究の多くが、「塾・教室」と「習い事」に焦点をあてて調査研究がなされてきた。子どもの学校外教育を調査でとらえるときに、その概念は意外とあいまいで、測定の指標も調査ごとに異なっていることが多い。

本調査の特徴は、調査設計の段階で、学校外教育の測定を精緻化した点にある。調査では、「学校外教育」として「この1年間で定期的に」経

験した諸活動を測定している。

これを概念化すると、「学校外教育とは、子どもが学校の授業以外で定期的に経験する選択的な学習活動である」といえる。

本調査では、学校外教育について、学習内容と学習の場の違いから大きく4つに分類し、調査した点が特徴となっている。学習面では、学習の場の違いで2つのタイプがある。1. 「家庭学習」活動として、家庭教師や通信教育、学習ソフトや教材などを利用したものがある³⁾。また家庭以外での学習である、2. 「塾・教室」に通う教室学習活動⁴⁾がある。さらに、3. 運動および「スポーツ活動」⁵⁾と、4. 音楽活動などの「芸術活動」⁶⁾がある。注にも示したように、学校の授業以外で経験する子どもの活動を網羅的に調べた調査である。

この4種類の活動の有無を基準に、子どもの活動パターンを16種類に分類した結果が表A-1である。子どもの学年段階により、主な活動パターンは変化していく。

表A-1 学年段階別の子どもの活動パターン比率

○=活動あり ×=活動なし (%)

タイプ	活動パターン	家庭学習	塾・教室	スポーツ活動	芸術活動	全体	3歳	4歳(年少)～6歳(年長)	小学校低学年	小学校中学年	小学校高学年	中学生	高校生
①	全活動あり	○	○	○	○	7.4	1.4	4.3	8.2	11.7	11.1	8.4	5.0
②	家庭+塾+スポーツ	○	○	○	×	13.7	1.5	4.9	13.8	17.0	18.2	23.7	10.0
③	家庭+塾+芸術	○	○	×	○	4.8	2.2	2.4	3.4	4.3	5.8	8.0	6.0
④	家庭+塾	○	○	×	×	5.0	3.3	3.5	4.0	4.8	7.9	5.9	5.5
⑤	家庭+スポーツ+芸術	○	×	○	○	6.1	2.8	8.7	8.9	6.7	5.2	5.0	3.1
⑥	家庭+スポーツ	○	×	○	×	12.7	4.7	12.3	17.5	14.9	11.7	13.9	9.4
⑦	家庭+芸術	○	×	×	○	5.3	6.1	5.8	4.0	3.8	3.9	5.8	7.5
⑧	家庭学習のみ	○	×	×	×	9.4	24.0	17.7	8.6	4.2	5.0	4.3	7.4
⑨	塾+スポーツ+芸術	×	○	○	○	1.8	0.4	1.3	1.7	2.7	3.3	1.4	1.9
⑩	塾+スポーツ	×	○	○	×	5.2	0.6	2.0	5.5	7.0	7.9	6.8	5.3
⑪	塾+芸術	×	○	×	○	1.5	1.1	0.8	0.9	1.8	1.3	1.7	2.7
⑫	塾のみ	×	○	×	×	2.7	2.7	2.1	3.1	3.3	3.5	1.9	2.6
⑬	スポーツ+芸術	×	×	○	○	2.5	2.6	3.4	2.8	2.8	2.1	1.5	2.3
⑭	スポーツのみ	×	×	○	×	8.3	4.6	8.7	8.2	9.4	7.2	6.6	12.3
⑮	芸術のみ	×	×	×	○	3.2	5.2	4.3	2.1	1.4	1.7	2.2	6.6
⑯	活動なし	×	×	×	×	10.3	36.9	17.8	7.3	4.1	4.0	2.8	12.4
	全体合計					100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注1 家庭学習は、「この1年間で、お子様が家庭でしている学習方法や使っている教材はありますか」という設問に対して、「その他の学習方法・教材」を含む11の選択肢のうち、いずれかを選択の場合を「○」、「何もしていない」を選択した場合を「×」とした。

注2 塾・教室は、「この1年間で、お様が定期的に通っていた塾・教室はありますか」という設問に対して、「その他の塾・教室」を含む16の選択肢のうち、いずれかを選択の場合を「○」、「何もしていない」を選択した場合を「×」とした。

注3 スポーツ活動は、「この1年間で、お様が定期的に行っていた運動やスポーツはありますか」という設問に対して、「その他のスポーツ」を含む26の選択肢のうち、いずれかを選択の場合を「○」、「何もしていない」を選択した場合を「×」とした。

注4 芸術活動は、「この1年間で、お様が定期的に行っていた音楽活動や芸術活動はありますか」という設問に対して、「その他の音楽・芸術活動」を含む14の選択肢のうち、いずれかを選択した場合を「○」、「何もしていない」を選択した場合を「×」とした。

注5 太字は10%以上の項目を示す。

まず、学年段階別に活動パターンの特徴をみておこう。

- 1) 3歳では、4種類の活動のどれも行っていない「活動なし」のタイプ⑯の子どものが36.9%でもっとも多い。また「家庭学習」(タイプ①～⑧合計)をする子どもの比率は、3歳児全体の46.0%と多く、4人に1人が「家庭学習のみ」(タイプ⑧)を経験している。
- 2) 4歳(年少)～6歳(年長)になると、「活動なし」が17.8%へ減少し、かわりに「家庭学習」(タイプ①～⑧合計、59.6%)と「スポーツ活動」(タイプ①, ②, ⑤, ⑥, ⑨, ⑩, ⑬, ⑭合計、以下同、45.6%)を行う子どもが増えている。
- 3) 小学生になると、「スポーツ活動」が増え小学校中学年でみると72.2%である。そのうち、「家庭学習+スポーツ活動」(タイプ⑥)が14.9%に増え、「家庭学習+塾・教室+スポーツ活動」(タイプ②)も17.0%となる。
- 4) 中学生では多面的な活動が増えてきている。4人に1人がタイプ②の「家庭学習+塾・教室+スポーツ活動」(23.7%)となっている。
- 5) 高校生になると活動は低下し、「活動なし」が12.4%、「スポーツ活動のみ」(タイプ⑭、12.3%)とタイプ②の「家庭学習+塾・教室+スポーツ活動」(10.0%)が多い。

活動パターンのうち、4種類の活動すべてを経験している、もっとも恵まれた層のタイプ①の子どもは、小学生～中学生にかけて10%前後の比率で存在する。

逆に、もっとも経験の少ないタイプ⑯「活動なし」の子どもの比率に注目しよう。3歳と4歳(年少)～6歳(年長)では年齢が低いため、「活動なし」層は多い。小学生以降は減少するものの、いずれにも関与しない子どもが、少数だが存在している。その比率は、小学校低学年では7.3%、小学校中学年で4.1%、小学校高学年で4.0%であった。学校での授業以外になにも経験しないこれらの子どもは、教育文化活動全般において、経験の乏しい層といわざるを得ない。

中学生では部活動が増えることもあり、「活動

なし」層は28%に減少する。高校生では、嗜好の多様化や自発的な活動も増えるため、12.4%とその数値は高い。

やはり問題となるのは、親の意識や関与の仕方によってその影響を受ける小学生の子どもの非活動であろう。

3. 活動パターン別の教育費と家庭の特性

学校外教育費の研究では、都村(2008)が学校外教育の類型別に教育費を算出し、保護者の特性を分析している。ただし活動は、塾と習い事に限定され、習い事の活動の種類はスポーツ活動と芸術活動が混在している。

今回のデータでは、習い事を活動内容でスポーツ活動と芸術活動に分離し、家庭での学習活動も含めた4種類の活動から、子どもの活動パターン別の教育費を算出した。表A-2では、16種類の活動パターン別に、月額教育費平均、世帯年収平均等の家庭の特性を明らかにした。

4種類の全活動を行っている「全活動あり」のタイプ①がもっとも教育費支出額(学校の授業料を含む)も高く、月額平均で44,300円、その家庭背景をみても世帯年収平均779万円、父母大卒率51.9%と、高い階層の家庭の子どもであることがわかる。

他方、「活動なし」のタイプ⑯は、教育費が最も低く17,600円、世帯年収が536万円、父母大卒率23.5%と、他のタイプと比べて恵まれた階層とはいえない。

このタイプ⑯のなかには、幼児、高校生の不活動層が多いため、小学生のタイプ⑯だけを抽出して家庭背景をみてみよう。

小学生の「活動なし」のタイプ⑯に限定すると、教育費が9,100円、世帯年収が489万円、父母大卒率が13.4%と低い。専業主婦率66.1%、四大以上を期待する率が45.1%、女子率43.6%、平均子ども数2.10人という状態であった。家庭の経済資本および父母学歴において、もっとも低いグループであることがわかる(図表省略)。

すなわち相対的な貧困層では、小学生期にス

表A-2 子どもの活動パターンと教育費および諸属性

○=活動あり ×=活動なし

タイプ	活動パターン	家庭学習	塾・教室	スポーツ活動	芸術活動	人数(名)	構成比率(%)	教育費(月額)平均(円)	世帯年収平均(円)	父母大卒率(%)	専業主婦率(%)	女子率(%)	四大以上期待(%)	子ども数(人)
①	全活動あり	○	○	○	○	1,147	7.4	44,300	779万	51.9	56.1	65.0	87.2	1.8
②	家庭+塾+スポーツ	○	○	○	×	2,113	13.7	41,400	714万	40.5	58.8	33.6	86.0	1.9
③	家庭+塾+芸術	○	○	×	○	749	4.8	43,200	740万	44.9	57.4	83.6	83.4	1.8
④	家庭+塾	○	○	×	×	780	5.0	41,200	700万	35.6	61.0	54.4	82.6	1.8
⑤	家庭+スポーツ+芸術	○	×	○	○	946	6.1	31,600	658万	48.4	63.3	62.6	80.7	1.9
⑥	家庭+スポーツ	○	×	○	×	1,960	12.7	28,000	617万	33.2	64.5	32.4	79.7	1.9
⑦	家庭+芸術	○	×	×	○	818	5.3	32,000	659万	39.1	65.3	75.1	74.8	1.8
⑧	家庭学習のみ	○	×	×	×	1,448	9.4	22,400	552万	26.3	66.9	49.4	69.9	1.8
⑨	塾+スポーツ+芸術	×	○	○	○	285	1.8	38,800	725万	41.0	53.0	65.6	80.5	1.9
⑩	塾+スポーツ	×	○	○	×	810	5.2	35,300	678万	32.9	53.6	37.3	75.4	2.0
⑪	塾+芸術	×	○	×	○	226	1.5	38,200	756万	36.1	60.2	83.2	72.8	1.9
⑫	塾のみ	×	○	×	×	412	2.7	30,500	575万	23.3	62.6	55.1	70.2	1.9
⑬	スポーツ+芸術	×	×	○	○	383	2.5	26,400	631万	38.2	60.1	62.9	70.1	1.9
⑭	スポーツのみ	×	×	○	×	1,286	8.3	23,600	593万	26.5	57.5	30.9	68.3	2.0
⑮	芸術のみ	×	×	×	○	497	3.2	25,900	586万	30.5	59.2	74.8	61.5	1.9
⑯	活動なし	×	×	×	×	1,590	10.3	17,600	536万	23.5	66.8	47.1	62.3	1.8
	全体					15,450	100.0	31,600	646万	35.3	61.3	50.0	76.6	1.9

注1 教育費(月額)平均は授業料を含めた費用。「5千円未満」を2,500円、「5千~1万円未満」を7,500円、「8万~10万円未満」を90,000円、「10万円以上」を110,000円のように置き換えて算出した。

注2 世帯年収平均は、「200万円未満」を1,000,000円、「200~400万円未満」を3,000,000円、「1500万円以上」を17,500,000円のように置き換えて算出した。

注3 子ども数は、「1人」を1人、「5人以上」を6人と置き換えて算出した。

スポーツ活動、芸術活動の経験を得られない子どもが多く出現しやすく、子育ての格差問題として指摘できる。

解決策としては、ボランティア団体による活動や自治体主催の地域活動もあるので、金銭的な負担がなくても、子どもが何らかの教育活動を体験することが可能であるという情報提示と、親と子どもへの直接的・間接的な働きかけによる彼らの主体的選択を促す方法が考えられる。

4. 教育費支出からみた芸術・スポーツ活動の格差

教育費支出は、子どもの性別(ジェンダー差)と世帯収入によって差のあることが明らかになっている(Benesse教育研究開発センター『子どものスポーツ・芸術・学習活動データブック』2009 図1-2参照)。

教育費支出額のジェンダー差については、「スポーツ活動」では、男子平均4,200円、女子平均3,100円と1,100円の差がある。また「芸術活動」への教育費支出額は、とくに子どもの性別によ

る差が大きく、女子(平均3,300円)は男子(同1,000円)の3倍以上となっている。

家庭の世帯年収差も影響しており、年収400万円未満の家庭が「スポーツ活動」に平均2,400円を支出するのに対し、800万円以上の家庭では平均4,900円となる。当然、これらの数値は子どものスポーツ活動率の格差にもつながっている。芸術活動への支出額は、年収400万円未満家庭で平均1,100円、800万円以上家庭ではその3倍以上の3,600円であった。

このように親の経済状況は、子どもの芸術活動およびスポーツ活動に対して、参加の有無や教育費支出額の多少を左右する大きな要因となっていた(同、図3-5、図4-4参照)。しかし子どもの活動の階層差は、経済状況だけで生じるものではない。子どものスポーツ活動・芸術活動の規定要因を多面的に分析する必要がある。

5. 子どもの芸術活動の有無は何で決まるのか?

芸術活動をしている子どもの比率(芸術活動

の活動率)は、全体の32.7%であった(同、図2-2参照)。

親の社会的背景は、子どもの芸術文化活動経験にどのような影響を与えているだろうか。使用した説明要因は、子どもの性別、世帯年収、父母学歴、親の子どもへの進学期待、親の文化的嗜好で、これらのうちどの要因の影響が強いかを解明する。

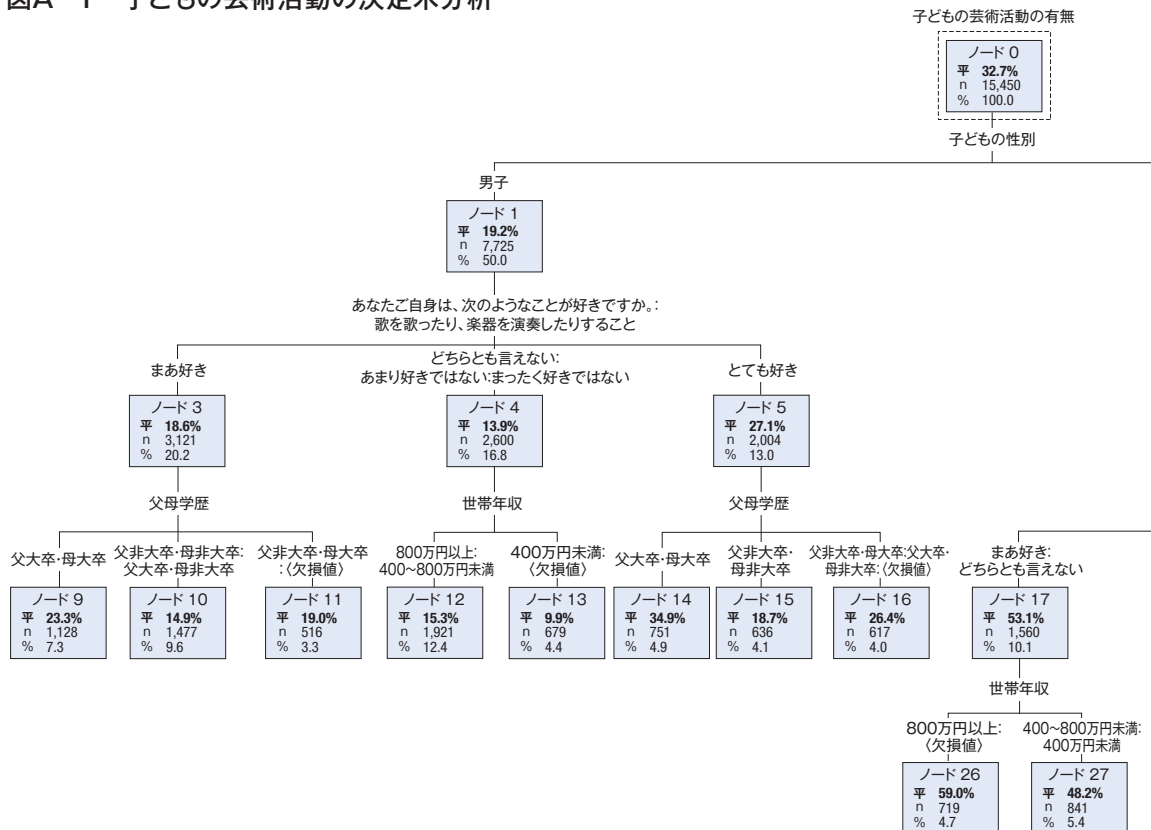
分析手法には、決定木分析を用い、結果は図A-1に示した。活動の有無に強い影響を与える変数順に集団(ノード)に分割していく手法である。成長方法はExhaustive Chaidを使用した⁷⁾。

図A-1から、子どもの性別(ジェンダー差)は、芸術活動を「する/しない」にもっとも大きな影響をもっている。とくに女子は男子よりも芸術活動を体験する率が高い。2番目に強い効果をもつのが、男子は母親の文化的嗜好(歌

や楽器好き)で、女子は父母学歴であった。3番目の要因は、男子は父母学歴か世帯年収で、女子は母親の文化的嗜好または子どもへの進学期待であった。

「親の学歴」と「母親の文化的嗜好」は、子どもの性別によって2番目か3番目かという順位に違いはあるものの、子どもの芸術文化活動に大きな影響を与えている。これらは「文化資本」という概念で理解することができる。文化資本の概念は、文化的能力の高さや卓越化した文化的嗜好性を表す社会学用語であるが、学歴の高さ(制度化された文化資本)も、芸術文化嗜好(身体化された文化資本)もともに、文化資本の指標の1つである(ブルデュー 1990)。すなわち文化資本の高い親が、子どもを芸術活動へと促す傾向が強いことが明らかとなった。母親の芸術文化的嗜好が、子ども(とくに女子)へと伝わり、文化の相続、ないしは文化の世代間再生

図A-1 子どもの芸術活動の決定木分析



産が行われている。

別の全国調査からは、成人女性において芸術文化活動と学歴の相関が高いことも明らかになっている（片岡 2000）。すなわちわが国では、高学歴女性ほどハイカルチャーを中心とした芸術文化活動に親しむことが多く、文化資本を蓄

積する傾向にある。そして親の文化資本は、子どもの芸術活動のおけいこ事、習い事を促す形で、すなわち家庭外の文化教育機関を通じて、子どもへと相続伝達されているといえよう。

4番目に強い規定要因として、女子で世帯年収や進学期待が効果をもった。世帯年収が高い

子どもの芸術活動の活動率の規定要因の要約

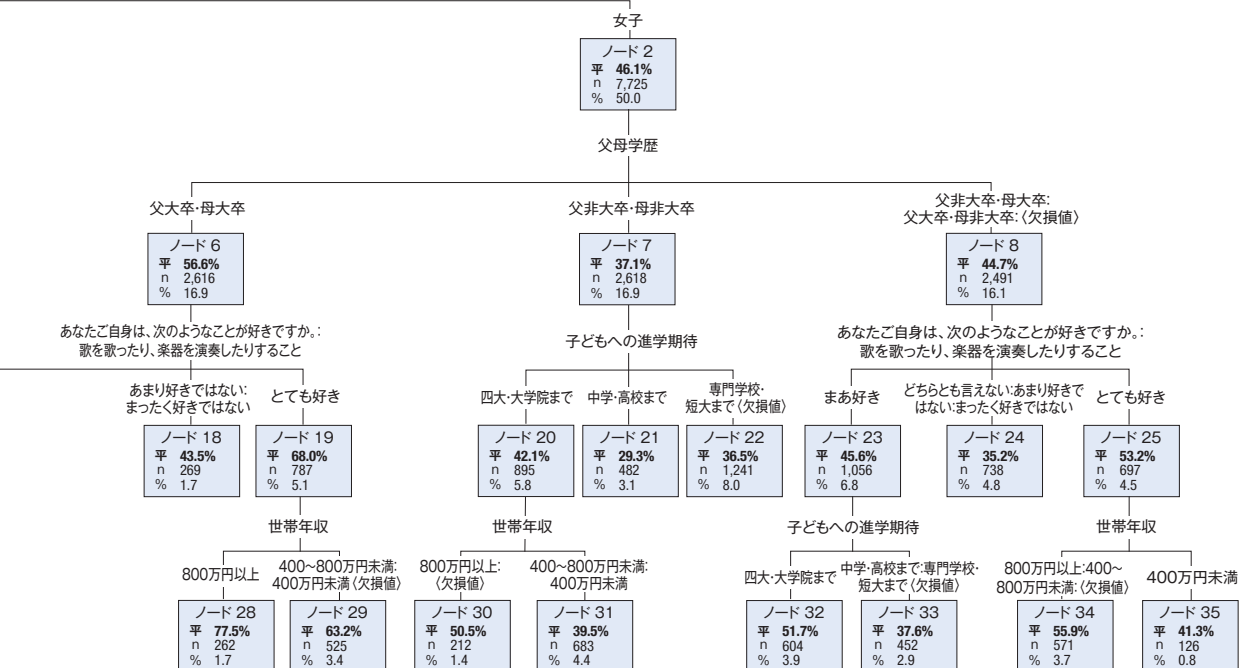
第1位 子どもの性別
 芸術活動率は、男子19.2%に対し、女子は46.1%と男子の2倍以上の高い活動率を示す。

第2位 男子は母親の文化的嗜好／女子は父母学歴
 男子は、母親が「歌を歌ったり、楽器を演奏したりすることが好き」か否かで活動率が異なる。「とても好き」な親では活動率は27.1%、「どちらとも言えない・好きではない」親では活動率は13.9%である。女子は、父母ともに大卒なら56.6%、父母とも非大卒ならば37.1%である。

第3位 男子は父母学歴もしくは世帯年収／女子は母親の文化的嗜好もしくは高い進学期待
 男子は父母学歴もしくは世帯年収が、女子は母親の文化的嗜好、もしくは子どもへの高い進学期待が、子どもの芸術活動にプラスの影響を与える。

第4位 女子は世帯年収もしくは子どもへの進学期待

平：芸術活動をしている比率
 n：今回の調査における人数
 %：今回の調査における構成比



家庭ほど、また進学期待の高い家庭ほど、女子の芸術活動率が高くなる。

以上から考えると、家庭の経済状態は、子どもの芸術活動を規定するうえで必要条件ではあるものの、もっとも重要な要因とはなっていないことがわかる。

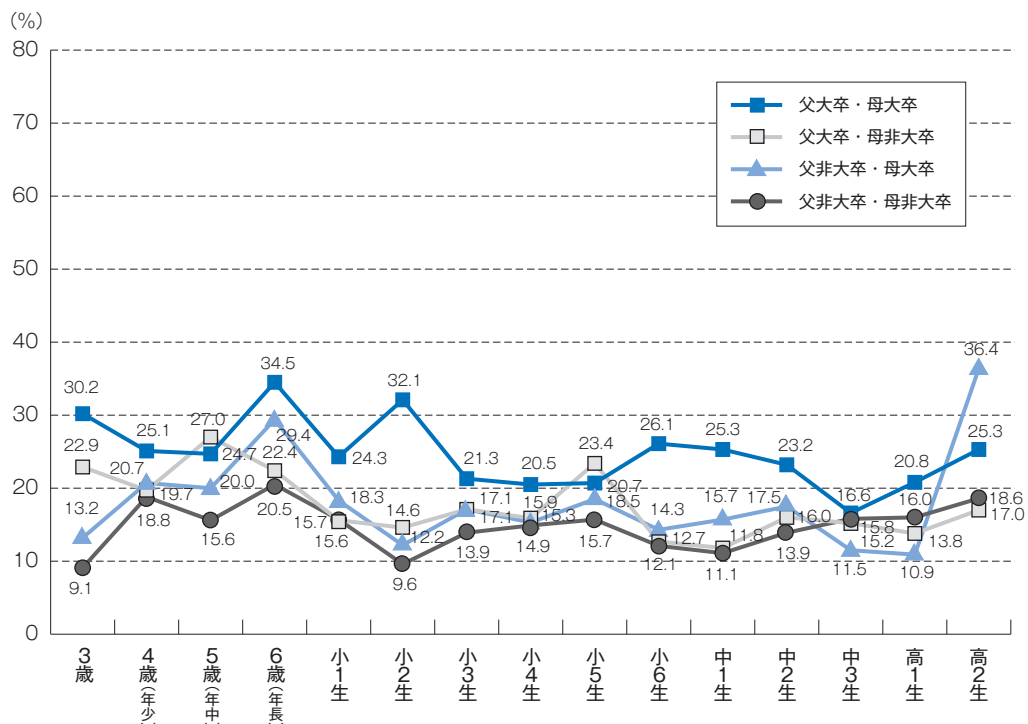
上記をまとめると、子どもを芸術活動へ向かわせる重要な要因は、子どものジェンダーであり、親の文化資本なのである。また子どもの芸術活動は、親の学歴に象徴される家庭の文化資本のあらわれでもあり、親の子どもへの進学期待の高さともパラレルであった。経済的な条件がゆるせば、女子において、高い学歴を期待する親ほど文化的な経験をさせていることがわかる。しかし男子では、家庭の経済的条件がよくても、女子ほどに芸術活動の活動率は高くはならない。

このことから、子どもの芸術活動経験は、子どもの性別、親の学歴資本と文化的嗜好性、そして子どもへの進学期待がむすびついたところで生じていることがわかる。つまり、高学歴高収入の親たちは、とくに女子に対して、単に学力による学歴上昇だけではなく、文化的教養を求めていると考えられる。これは従来の知見(片岡 1992, 1998, 2001, 2006)とも一致する。

表A-3では、芸術活動の活動率の上位と下位を中心に、各ノード(集団)の特徴を明らかにしておこう。

図A-2から男子では、父母学歴によって、芸術活動の活動率に大きな差は生じていないが、父母ともに大卒の場合に高くなっている。また図A-3より、女子では、父母ともに大卒層で活動率がもっとも高く、父母学歴による差が顕著であることがわかる。

図A-2 男子の芸術活動の活動率と父母学歴(全体・学年別)



注1 芸術活動の活動率は、「この1年間で、お子様が定期的に行っていた音楽活動や芸術活動はありますか」という設問に対して、「その他の音楽・芸術活動」を含む14の選択肢のうち、いずれかを選択した%。

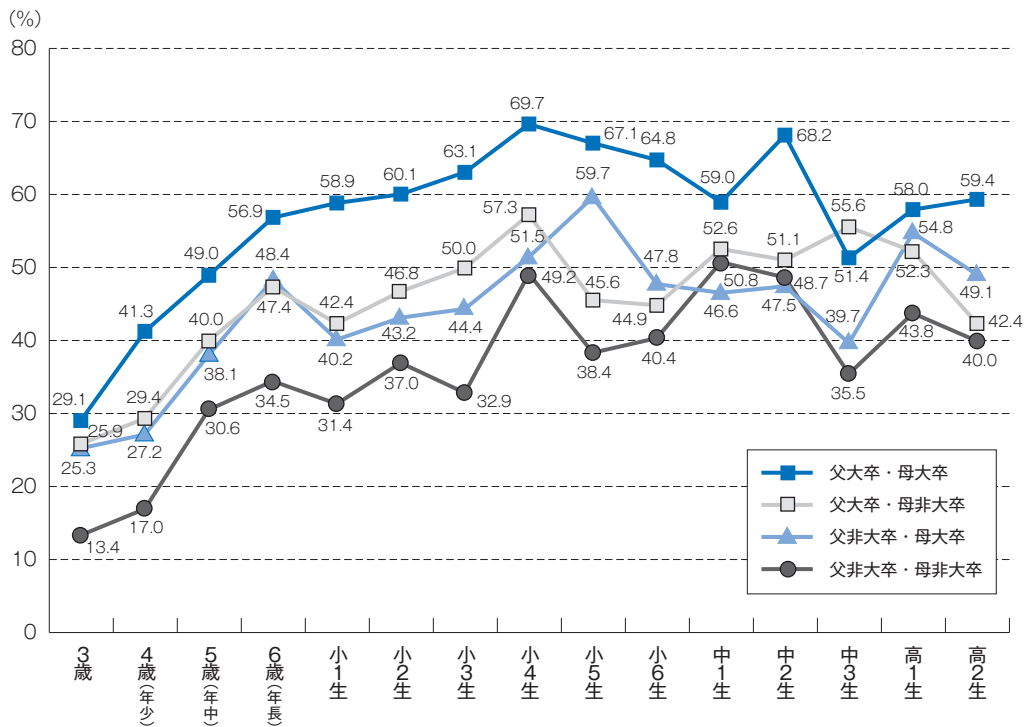
注2 父母学歴は、父親、母親それぞれについて、短期大学、四年制大学、大学院を卒業している場合を「大卒」とした。

表A-3 芸術活動の活動率の上位および下位ノードの特徴

(%)

ノード番号	特 徴	子どもの比率	芸術活動の活動率
28	女子・父母大卒・文化的嗜好高・年収800万円以上	1.7	77.5
29	女子・父母大卒・文化的嗜好高・年収800万円未満	3.4	63.2
26	女子・父母大卒・文化的嗜好中・年収800万円以上	4.7	59.0
34	女子・父or母非大卒・文化的嗜好高・年収400万円以上	3.7	55.9
32	女子・父or母非大卒・文化的嗜好中・四大か大学院まで進学期待	3.9	51.7
	中略		
15	男子・文化的嗜好高・父母非大卒	4.1	18.7
10	男子・文化的嗜好中・父母非大卒と父大卒・母非大卒	9.6	14.9
12	男子・文化的嗜好低・年収400万円以上	12.4	15.3
13	男子・文化的嗜好低・年収400万円未満	4.4	9.9

図A-3 女子の芸術活動の活動率と父母学歴(全体・学年別)



注1 芸術活動の活動率は、「この1年間で、お子様が定期的に行っていた音楽活動や芸術活動はありますか」という設問に対して、「その他の音楽・芸術活動」を含む14の選択肢のうち、いずれかを選択した%。

注2 父母学歴は、父親、母親それぞれについて、短期大学、四年制大学、大学院を卒業している場合を「大卒」とした。

6. 子どものスポーツ活動の有無は 何で決まるのか？

スポーツ活動の活動率の特徴は、子どもの学年段階によって、差が大きいことである。とくに3歳、4歳（年少）では、まだスポーツ活動をさせる親は少なく、5歳（年中）以上の学年段階で多くなる（同、図2-1参照）。また高校に入ると男女ともに活動率は下がる。

スポーツ活動の有無にどのような要因が作用

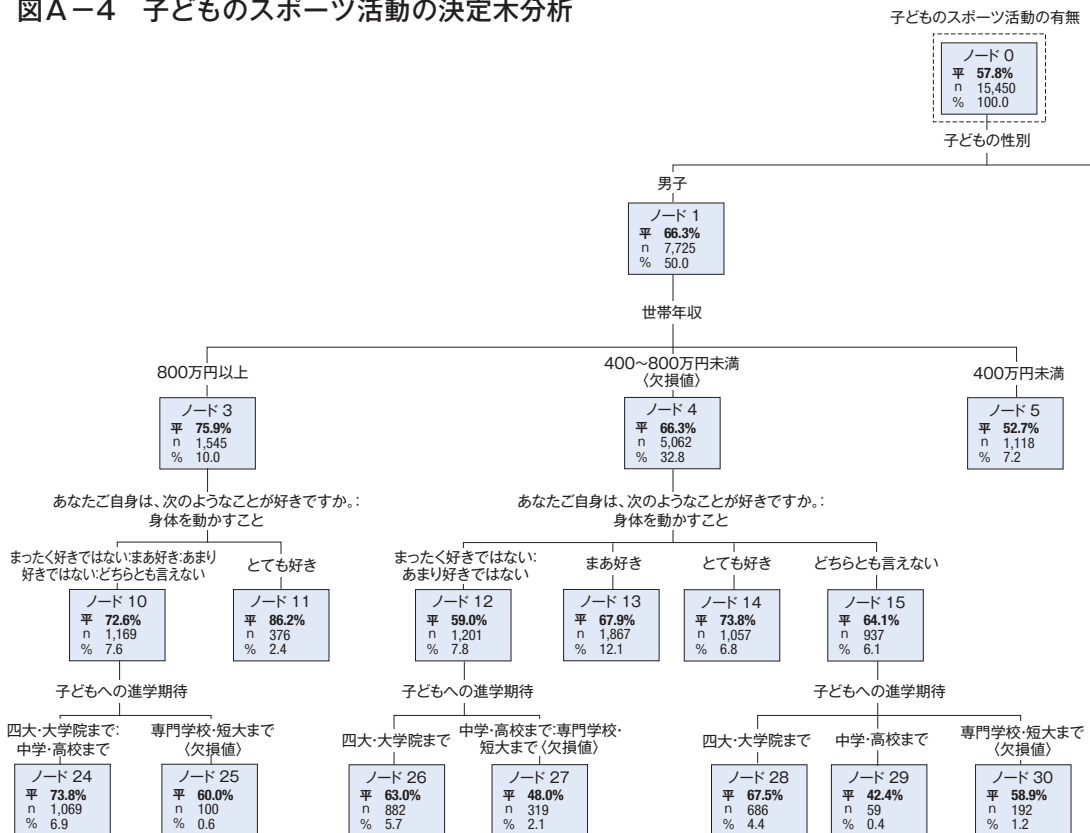
しているかを、決定木分析により明らかにした（図A-4）。使用した説明変数は、子どもの性別、父母学歴、世帯年収、子どもへの進学期待、母親のスポーツ嗜好（身体を動かすことが「好き」）である。

男子は女子に比べてスポーツ活動をする子どもが多いが、経済階層の影響を受けやすい。男子の場合、活動率は世帯年収800万円以上の家庭で75.9%、400～800万円未満で66.3%、400万円未満で52.7%となる。

子どものスポーツ活動の活動率の規定要因の要約

<p>第1位 子どもの性別 男子66.3%、女子49.3%。</p> <p>第2位 男子は世帯年収／女子は母親のスポーツ嗜好 男子は世帯年収／女子は母親のスポーツ嗜好（身体を動かすことが「好き」）で差がある。</p> <p>第3位 男子は母親のスポーツ嗜好／女子は父母学歴もしくは世帯年収</p>

図A-4 子どものスポーツ活動の決定木分析



逆に女子のスポーツ活動率は男子より低いが、母親のスポーツ嗜好、とくに身体を動かすことが好きかどうかで差が生じている。身体を動かすことが「とても好き」な母親の場合、女子の活動率は61.3%と高い。しかし「好きではない（あまり+まったく）」母親の場合では、39.1%と低い。

小学生にデータを絞った決定木分析を行ったが（結果省略）、規定要因の順位や構造はほぼ同

様であった。しかし中学生の場合は、学校での部活動の機会が増えることの影響もあってか、全体の活動率が上昇するが、規定要因は、1位が子どもの性別、2位が母親のスポーツ嗜好で、親の階層変数は中学生の活動率にほとんど影響していないことがわかった。つぎに示すように、とくに中学生女子では母親のスポーツ嗜好の差が大きく影響していることがわかる。

中学生のスポーツ活動率の規定要因の要約

第1位 子どもの性別

男子80.6%、女子54.0%。

第2位 母親のスポーツ嗜好

男子で、母親が「身体を動かすことが『とても好き』」の場合89.3%。

女子で、母親が「身体を動かすことが『とても好き』」の場合72.9%。

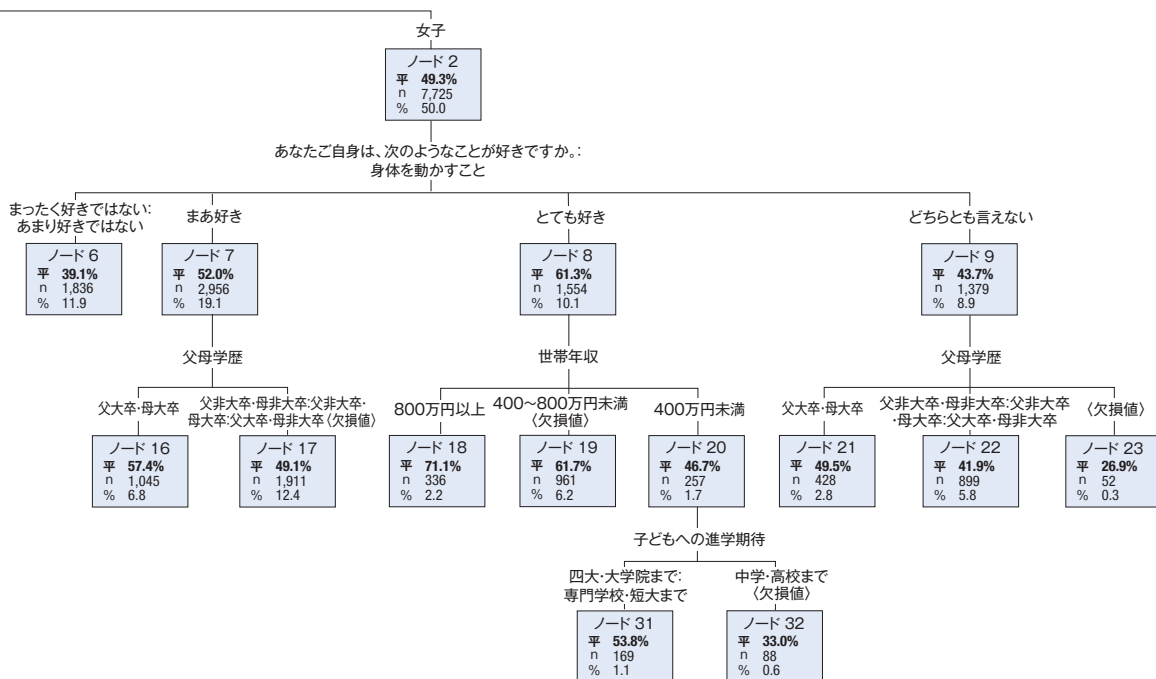
男子で、母親が「身体を動かすことが『あまり好きではない』」の場合70.5%。

女子で、母親が「身体を動かすことが『まったく好きではない』」の場合28.4%。

平：スポーツ活動をしている比率

n：今回の調査における人数

%：今回の調査における構成比



7. なぜ女子は芸術活動が多く、男子はスポーツ活動が多くなるのか

：なぜ女の子はピアノで、男の子はスポーツが好きか？

芸術活動とスポーツ活動の活動率にはジェンダー差の大きいことが、多くの調査で示される。とくに女子の芸術活動の活動率が男子よりも高くなる。この現象はかなり以前からみられる傾向であり、日本社会においては音楽芸術関連の学校外活動や習い事、おけいこ事は、きわめて安定的なジェンダー差を示してきた。

では、なぜ女子はピアノに代表されるような文化芸術活動を多く実践するのか。親がそれを期待するという点では、親の教育期待のあらわれでもあると同時に、子どもたち自身の嗜好性でもあるといえる。とくに女子に対しては、文化芸術的素養を期待する親が、家庭外でも、個人レッスンや教室へ通わせることによって、さまざまな音楽芸術活動を子どもに経験させていることが今回の調査から明らかになった。

調査では音楽や芸術活動について、親の意見をたずねている。図A-5は、子どもの性別による親の肯定比率を示した。

図A-5では、すべての項目で子どもの性別

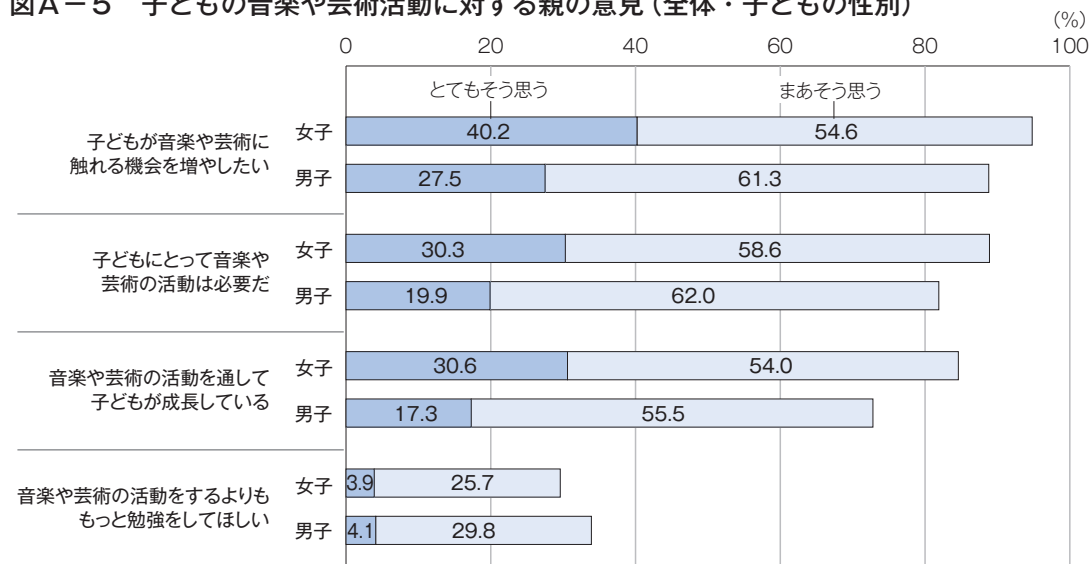
によって親の肯定率に有意な差がみられた。女子に対しては、音楽や芸術活動を奨励する比率が高くなり、男子に対しては勉強を優先してほしいという意見で比率が高くなった。具体的には、「子どもが音楽や芸術に触れる機会を増やしたい」に「とてもそう思う」「そう思う」と回答した親の比率は、女子で94.8%、男子で88.8%であった。また「子どもにとって音楽や芸術の活動は必要だ」では、女子で88.9%、男子で81.9%である。

もっとも大きな差異が生じた項目は「音楽や芸術の活動を通して子どもが成長している」で、女子では84.6%、男子で72.8%を示した。他方、男子が高くなったのは「音楽や芸術の活動をするよりもっと勉強してほしい」で、女子29.6%に対し、男子33.9%である。

もっとも性差の明瞭な「音楽や芸術の活動を通して子どもが成長している」という母親の意見を取り上げ、決定木分析を用いて規定要因を探った(図A-6)。投入した説明変数は、子どもの性別、学校段階、父学歴、母学歴、世帯収入、子どもへの進学期待である。

図A-6より、まず子どもの性別で親の意見は異なる。音楽や芸術の活動を通して子どもが成長しているかどうかについて「とてもそう思

図A-5 子どもの音楽や芸術活動に対する親の意見(全体・子どもの性別)

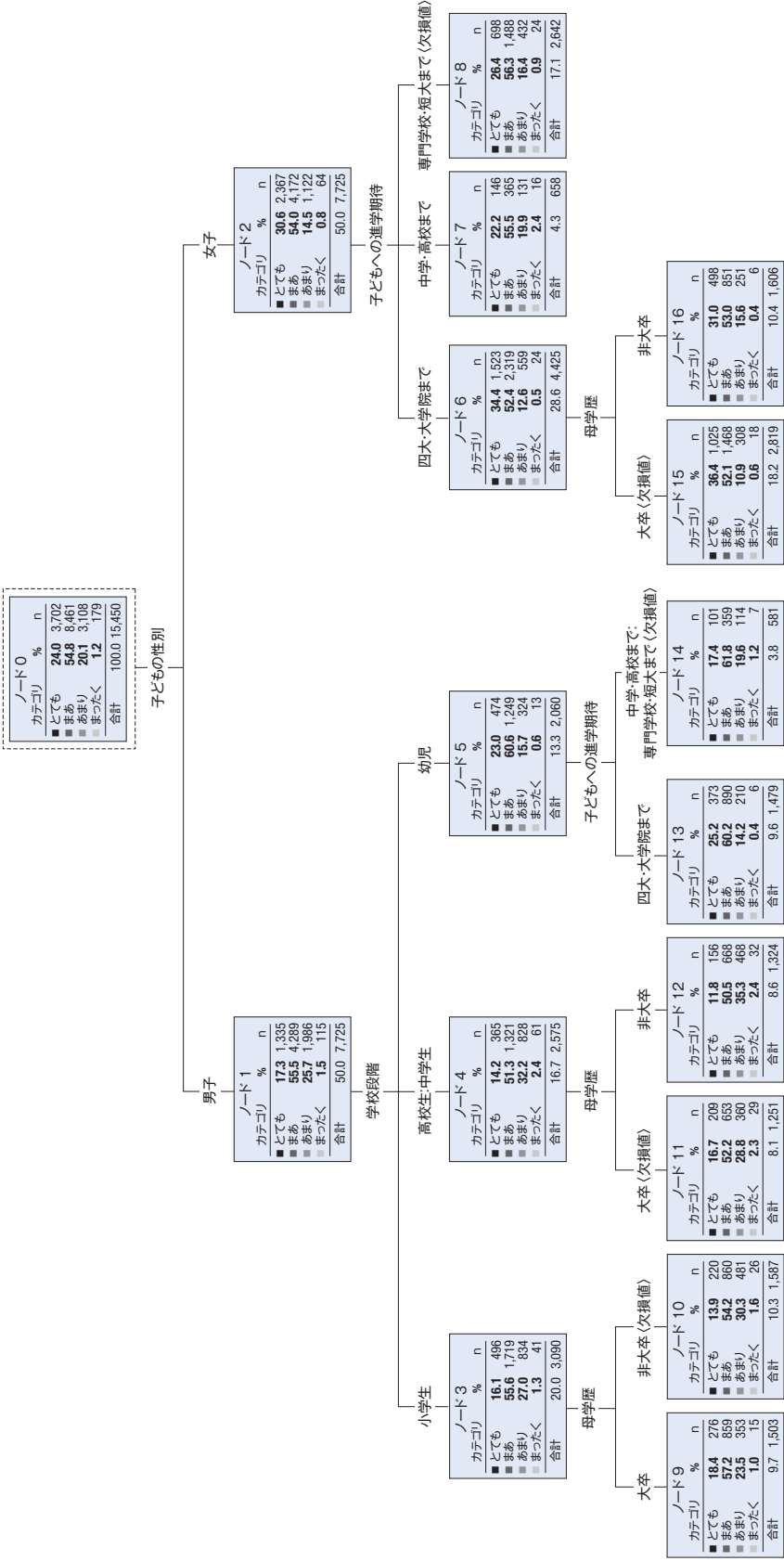


注 「お子様の音楽や芸術(美術)にかかわる活動に関して、あなたはどのように思いますか」という設問の各項目に対する回答による。

図A-6 「音楽や芸術の活動を通して子どもが成長している」の決定木分析

お子様の音楽や芸術(美術)にかかわる活動に関して、
あなたはどのように思いますか。
<音楽や芸術の活動を通して子どもが成長している>

n : 今回の調査における人数
% : 今回の調査における構成比



注1 「とても」は「とてもそう思う」、「まあ」は「まあそう思う」、「あまり」は「あまりそう思わない」、「まったく」は「まったくそう思わない」を示す。
注2 「とても」「まあ」「あまり」「まったく」の%は、各ノードでの回答比率を示す。また、合計の%は、調査全体に占める各ノードの構成比を示す。
(例えばノード9の合計9.7とは、男子の小学生で母学歴が大卒にあてはまるケース1,503名がデータ全体に占める比率である。)

う」と答えた母親は、男子で17.3%だが、女子では約2倍の30.6%である。

さらに2番目の要因として、男子は学校段階の規定力が強く、幼児（3歳～6歳）で肯定率が高い。女子では2位に子どもへの進学期待がきて、四大・大学院までを期待する母親の肯定率が高い。

3番目の規定要因として、男子では母親が大卒であるか否か、また幼児（3歳～6歳）では進学期待で意見が分かれる。父学歴は効果をもたなかった。

男子の母親で非大卒の場合は、肯定率は低い。他方、女子の親では、まず進学期待の高さが芸術活動への肯定的意見となり、その次に母親の学歴が効果をもった。女子で四大・大学院までを期待する母親で、かつ母親が大卒の家庭では、芸術活動が子どもを成長させることへの肯定率は88.5%ともっとも高かった。しかし女子の母親の場合は、進学期待や親の学歴による差異は男子ほど大きくはなく、いずれも高い値を示した。

以上から、芸術活動が子どもの成長に役立つという意見をもつ親は、女子の親に多く、男子では幼児教育という形で、かつ四大・大学院までを期待する母親が男子の芸術活動を「成長」と結びつけていた。

しかしそれでもなお、なぜ子どものジェンダーによって芸術活動に差が生じるかについては、多くの疑問が残る。これに関しては、次の研究を参考までにあげておこう。

この現象は社会的にみると、「女性にとって芸術文化が女らしさの象徴資本となっている」ことと関連があることが明らかにされている（片岡 2006）。

すなわち文化活動のなかでも、とくにピアノ、美術鑑賞、茶道・華道など一般的にハイカルチャーと考えられている活動に対し、多くの成人男女が「女の子にはぜひやってもらいたい」と考えていることが別の調査から明らかになっている（片岡 2006）。このインタビュー調査の結果からは、これらのハイカルチャー活動は、「気配り」「情緒豊か」「芸術のセンス」「きれい

なしぐさ」「礼儀正しさ」「おしとやか」などの典型的な「女らしさ」の資質を身体化させるものとして理解されていることがわかった。そして音楽芸術活動は、こうした女性の家庭的資質、情緒性、礼儀作法などを身体化して家庭的で女らしい女性の形成に役立つと理解されることが多かった。つまり「女子は美に対して興味をもってほしい」（＝美的性向）と考える大人が多いのである。

今回の調査でも、芸術活動よりも勉強を期待する親が男子の親ほど多かった。それに対して女子には勉強で高い学力や学歴を身につけるよりも、芸術的な素養のほうが大事だと親たちが考えていると解釈できるのである。

さらに先の研究に従えば、人々の頭の中にある「文化定義」そのものがジェンダー化しているのである。ハイカルチャー活動は女性に似合う活動、男性にはあまり似合わないのではないかといった漠然とした通念となったステレオタイプな価値観をもっている人々が多く存在するということである。そしてこの定義を受け入れる人ほど、性別役割分業を肯定する傾向があった（片岡 2006）。

また他方で、男の子にはスポーツを経験して、「たくましい子」になってほしいという男性性へとつながる価値志向が明確にあらわれる。男子にはハイカルチャーは「どちらでもいい」「とくにやる必要はない」という消極的な意見も多かった。

このように日本文化のなかに埋め込まれた価値として、多くの人々が「男の子はスポーツで、女の子はピアノ」が望ましいとする価値観が強い。いいかえれば、文化への意味付与がジェンダー差を伴っているのである。その結果、あらゆる調査において、男子の習い事はスポーツが高く、女子の習い事は芸術文化系が有意に多いという結果となっている。

8. まとめ

スポーツ活動と芸術活動の規定要因を分析し、この2つの活動には大きなジェンダー差が

みられた。そして、母親の文化的嗜好の差や進学期待の差、父母学歴や世帯収入などの社会背景の影響があることがわかった。以下に要約しよう。

子どもの芸術活動の有無は、母親の文化的嗜好性（歌を歌ったり、楽器を演奏したりすることが好き）や父母学歴が大きな役割を果たしていることが明らかになったことは興味深い。これらは、文化資本という文化へのかかわり方の違いをあらわす概念で包括できるからである。すなわち親から子どもへの文化資本の相続、いかえれば文化的再生産が生じているのである。

また子ども芸術活動の規定要因として、家庭の経済状況は相対的にあまり強い効果をもたないことが、今回明らかにされた特徴的な知見である。経済よりもむしろ親の学歴や親の文化的嗜好に代表される「文化資本」や「家庭の文化的環境」の影響が強い。

他方、子どものスポーツ活動は、親の経済力と親のスポーツ嗜好で決まってくると考えられる。とくに母親のスポーツ嗜好の違いは、女子

に強く影響していた。スポーツ活動については、芸術活動においてみられたような親の学歴などの文化資本の影響は相対的に小さいという特徴もみられる。

スポーツ活動と芸術活動の社会的・文化的背景の格差を問題とするならば、スポーツ活動は親の経済力の影響に強く左右され、他方、芸術活動は親の文化資本と家庭の文化的環境の影響を強く受けていた。

そのなかでも、女子への芸術活動を期待する高学歴・高階層の親たちは、同時に子どもへの高い進学期待を示している、女子への教育投資が、学習と文化教養（芸術文化）の二重の戦略であることが特徴として浮かびあがった。しかし男子ではその傾向は弱く、男子の場合は学習とスポーツ活動というパターンが多い。

今回明らかになったように、親の嗜好性が家庭の経済力や文化資本を媒介として、子どものスポーツ嗜好や芸術嗜好に影響を与え、学校外教育活動が規定されるということが結論としていえるだろう。その際に、子どもの性別、すなわちジェンダー差が、構造として最も大きな差を生み出すことも大きな特徴であった。

<注・参考文献>

- 1) 質問は、スポーツ活動は「この1年間で、お子様が定期的に行っていた運動やスポーツはありますか（ありましたか）」、芸術活動は「この1年間で、お子様が定期的に行っていた音楽活動や芸術活動はありますか（ありましたか）」であり、選択肢として示された多様な活動項目への親の回答を用いた。
- 2) 学校外教育の場としては、民間の教育機関や個人教室、ボランティア団体、公益法人・NPO、自治体などの諸団体が運営する教室や活動の場などがある。
- 3) 「家庭学習活動」の学習方法としては、過去1年間で定期的に行った、家庭教師、通信教育、一括購入の教材、市販の参考書・問題集、塾の参考書・問題集、パソコンで配信される教材、パソコン用の学習ソフト、携帯ゲーム機用の学習ソフト、DVDやビデオの映像教材、その他の学習方法・教材などを指す。
- 4) 「教室学習活動」として、過去1年間で定期的に通っていた、学校が行う補習教室、幼稚園・小学校受験のための幼児教室、能力開発のための幼児教室、補習塾、進学塾、プリント教材教室、理科の実験教室、算数・数学教室、国語・作文教室、英会話・英語教室、習字／硬筆、そろばん、パソコン教室、料理教室、その他の塾・教室などを指す。
- 5) 「スポーツ活動」として、過去1年間で定期的に行っていた、スイミング、陸上競技／マラソン、体操教室・運動遊び、器械体操、新体操、ダンス、野球／ソフトボール、サッカー／フットサル、テニス、スカッシュ／ラケットボール、ゴルフ、バレーボール、バスケットボール、ラグビー、アメリカンフットボール、バ

ドミントン、卓球、柔道、剣道、空手、合気道、少林寺拳法、スキー／スノーボード、スケート、ボーイスカウト・ガールスカウト、その他のスポーツなどを指す。

- 6) 「芸術活動」として、過去1年間で定期的に行った、音楽教室、声学／ボイストレーニング、合唱／コーラス、楽器の練習・レッスン、リトミック、バレエ、演劇／ミュージカル、絵画／造形、写真、コンピュータ・グラフィック、華道／フラワーアレンジメント、茶道、日本舞踊、その他の音楽・芸術活動などを指す。
- 7) 別途実施したロジスティック回帰分析によっても、これらの変数が芸術活動の有無に有意な効果をもつことが支持されている。

ピエール・ブルデュー 1990 『ディスタンクシオンⅠ・Ⅱ』石井洋二郎訳、藤原書店。

片岡栄美 1992 「社会階層と文化的再生産」数理社会学会編『理論と方法』7巻1号(通巻11号)。

片岡栄美 1998 「地位形成に及ぼす読書文化と芸術文化の効果 —教育・職業・結婚における文化資本の転換効果と収益—」片岡栄美編『文化と社会階層』(1995年SSM調査シリーズ第18巻)SSM調査研究会。(2006『現代日本社会階層調査研究資料集(全6巻・別冊1)—1995年SSM調査報告書(大型本)』日本図書センター)。

片岡栄美 2000 「文化的寛容性と象徴的境界 —現代の文化資本と階層再生産—」今田高俊編『社会階層のポストモダン』181-220、東京大学出版会。

片岡栄美 2001 「教育達成過程における家族の教育戦略 —文化資本効果と学校外教育投資効果のジェンダー差を中心に—」『教育学研究』68巻3号、1-15、日本教育学会。

片岡栄美 2006 「文化定義のジェンダー化に関する研究 —言説からみる文化活動への意味付与と性役割意識—」関東学院大学人文科学研究研究所報29号。

都村聞人 2008 「保護者は小・中学生の学校外教育費をどのように支出しているか」『学校教育に対する保護者の意識調査2008報告書』Benesse教育研究開発センター。